

事例報告 2

富士郡家の原風景と富士川

佐藤 祐樹
(富士市教育委員会)

はじめに

古代中国では「善く国を治める者は、必ずまず水を治める」と言われ、日本でも武田信玄による「信玄堤」を含めた富士川の流水のトータルコントロールシステムは現在もなお機能している。富士市においても延宝2年(1674)、中里村の古郡家3代による50余年をかけた「雁堤」の築堤工事により、富士川下流域は加島五千石といわれた新田地帯に開発され、現在の富士市発展の礎となったと評価される。

また、徳川家康が京都の豪商である角倉了以に富士川の開削を命じたことは、甲斐の年貢米や豊富な物資を大量に江戸に運ばせるためであり、「川の道」の確立といえる。

古代の駿河国富士郡においても、富士川が果たした役割は大きく、流通を支える「道」として地域の発展にとって欠かせない存在であったと考えられている。そこで、本論では、古代富士郡の発展を支えた川の役割について紹介していくこととしたい。

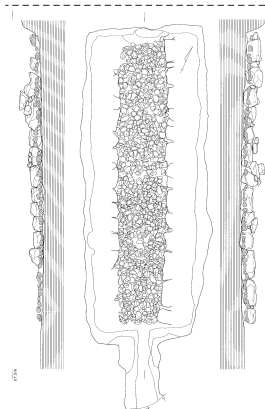


1. 別所古墳群
2. 丸ヶ谷戸遺跡
3. 中野遺跡
4. 妙見古墳群
5. 山王古墳群
6. 中原4号墳
7. 横沢古墳
8. 西平1号墳
9. 伊勢塚古墳
10. 東平1号墳
11. 国久保古墳
12. 実円寺西1号墳
13. 東坂古墳
14. 富士岡1古墳群・花川戸4号墳
15. 寺屋敷古墳
16. 天神塚古墳
17. 琴平古墳・道東古墳
18. 須津J-6号墳・千人塚古墳
19. 浅間古墳
20. 沖田遺跡
21. 船津薬師塚古墳
22. 船津ふくべ塚古墳
23. 荒久城山古墳
24. 秋葉林1号墳
25. 的場3号墳
26. 庚申塚古墳・山の神古墳
27. 神明塚古墳・松長古墳群

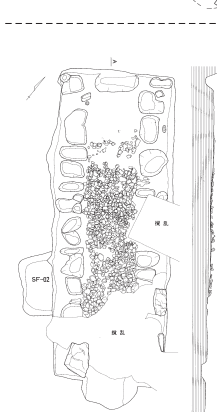
図1 富士・沼津地域の主要古墳

600

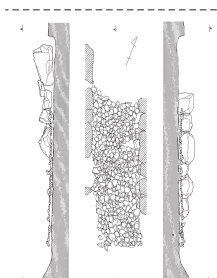
谷津原第1号墳



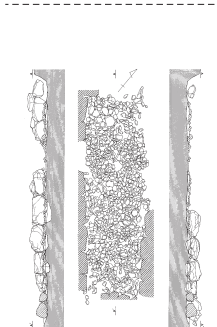
谷津原第6号墳



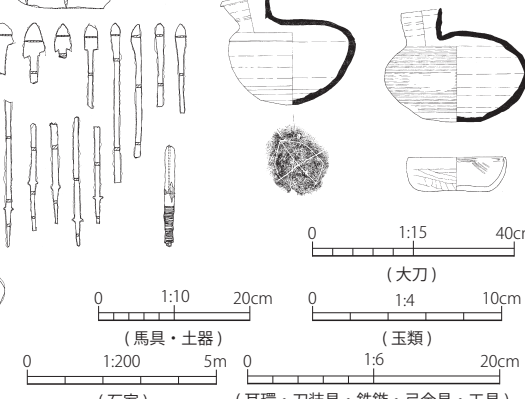
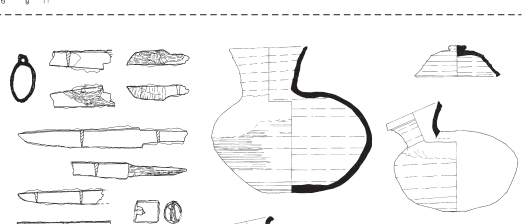
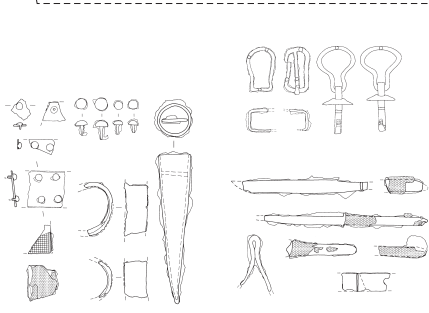
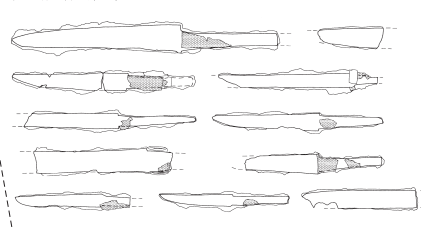
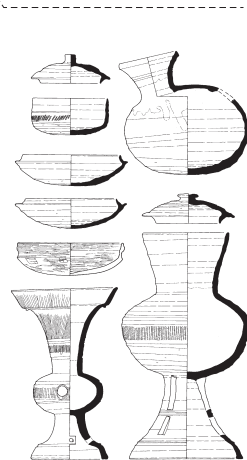
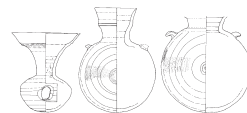
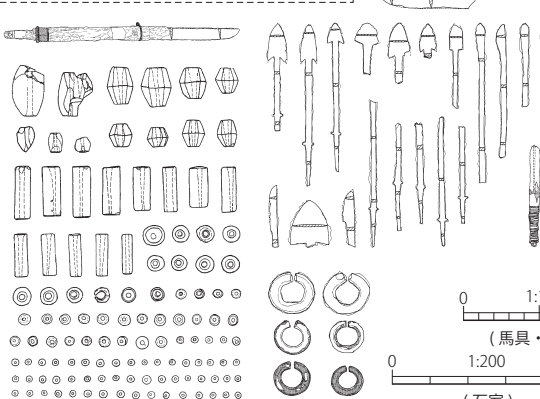
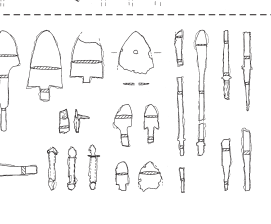
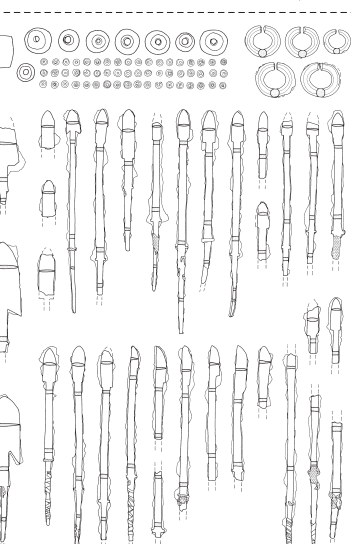
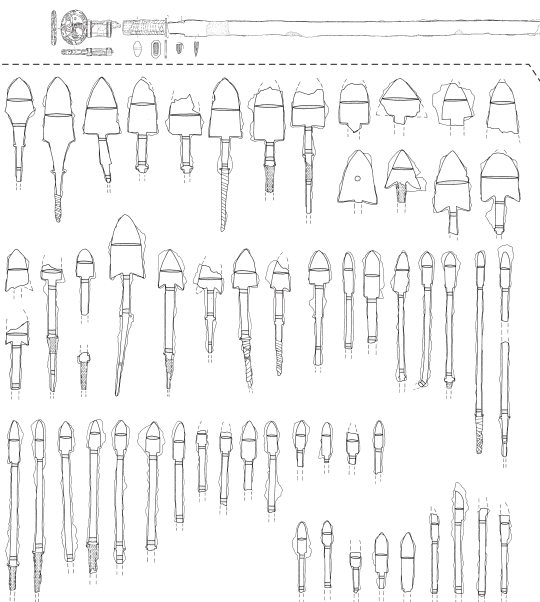
谷津原第7号墳



谷津原第15号墳



谷津原第16号墳



0 1:15 40cm
(大刀)
0 1:4 10cm
(玉類)
0 1:200 5m
(石室)
0 1:10 20cm
(馬具・土器)
0 1:6 20cm
(耳環・刀装具・鉄鏃・弓金具・工具)

図2 谷津原古墳群の造墓活動(1)

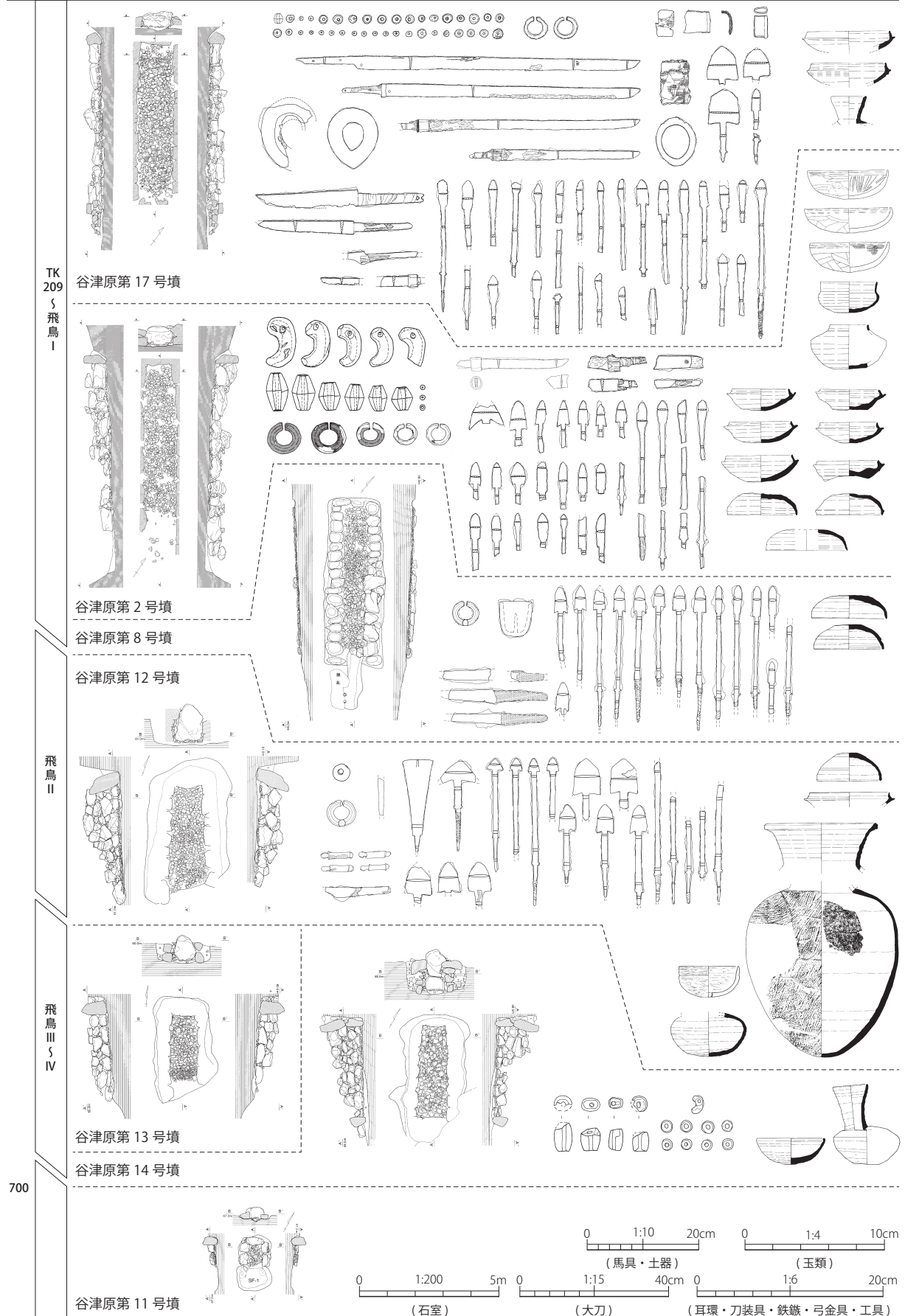


図3 谷津原古墳群の造墓活動(2)

1 富士川西岸古墳群の胎動と富士川東岸の集落域

駿河湾から富士川を遡り甲斐に至るルートが道として機能し始めたのは、古く縄文時代の頃であったと考えられる。弥生時代後期には富士川を10km程度、遡った場所にある清水岩の上遺跡で菊川式土器の影響を受けた土器がまとまって出土しており、広く太平洋岸と甲斐を含めた中部高地との活発な地域間交流の存在を示している（佐藤 2015）。

富士川西岸古墳群の胎動 富士川の西岸には200基以上の古墳群が存在したと推定され、その大部分が富士川に注ぐ谷津川周辺の丘陵及び岩淵山塊の斜面に立地し、谷津原古墳群、室野坂古墳群、山王古墳群、妙見古墳群、小山古墳群が半径200mの範囲に群集している（石川 2008）。谷津原古墳群では、7世紀初頭の谷津原1号墳の築造（大谷 2022）から造墓活動が開始されて、7世紀を最盛期として、石室規模を小型化しつつ8世紀に至るまで墓域が展開することが明らかとなっている。

富士川東岸の集落域 一方、7世紀の集落域については、古墳群の展開する富士川西岸では明確には確認できず、造墓集団の拠点を富士川西岸域の古墳群周辺に求めることは困難である。その候補地として挙げられるのが、沢東A遺跡をはじめとした富士川東岸域の集落群である。

その当時、富士川下流の流路は、現在の河道より東寄りの田子ノ浦港方向に向かい多くの派川を持って駿河湾に流入し、広大な富士川扇状地を形成していたと考えられている。富士川西岸古墳群と沢東A遺跡はこの富士川扇状地を挟んで立地する位置関係にあたる。沢東A遺跡は古墳時代中期の5世紀後半に出現し、倭王権の東国支配の一端を示す新たなカミマツリである石製模造品を使用した水辺祭祀の存在が確認され、潤井川を含めた治水に対して新たな灌漑技術を備えた渡来人を含む先進技術者集団の居住エリアと考えられている。6世紀後半に作られた伝法古墳群内の中原4号墳の被葬者もこのエリア



図4 古代富士郡家周辺の景観（8世紀）

を主な活動拠点として活躍していたと想定され、集落としての最盛期を迎える7世紀には、富士市域でも随一の規模を有する大集落として発展している。

愛鷹山に造られた1000基以上の古墳の造墓集団の拠点に浮島ヶ原低地を挟んだ田子ノ浦砂丘上の集落に求めるのと同じように、富士川西岸古墳群の造墓集団の拠点に富士川扇状地を挟んだ沢東A遺跡周辺に求めることもできるだろう。

2 富士郡家の成立と

伝法古墳群・富士川西岸古墳群の連動

富士郡家の成立 奈良時代になり、沢東A遺跡の集落規模が一気に縮小するのに対応するようにして、現在の富士市役所の北側一体にひろがる東平遺跡（富士郡家）が急成長をみせる。郡家設置以前の評家については明確ではないが、仮に設置されているとしたら、前述の沢東A遺跡が有力な候補地と言える。東平遺跡は富士郡家の比定地とされている



図5 中原第4号墳出土品

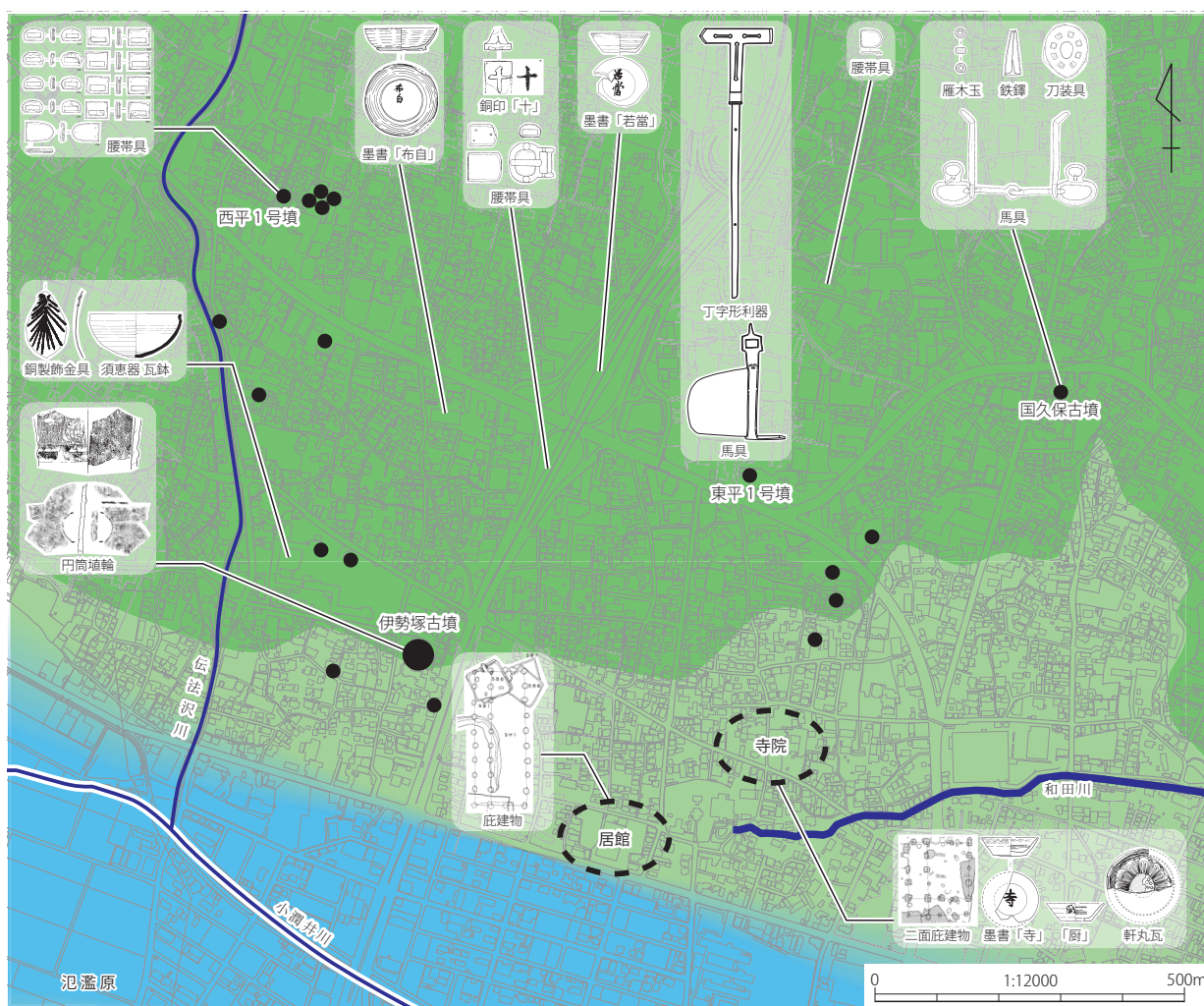


図6 富士郡家の様相

ものの、発掘調査において郡司が政務にあたる政庁や正税出挙保管の正倉、宿泊用の館などの構造は明確になっていない。しかし、整然と並ぶ倉庫群の存在や墨書「布自」の出土など様々な調査成果から東平遺跡一帯を富士郡家と考えることは学界の共通認識になってきているといえる。特に、郡家成立以前の6世紀後半から7世紀にかけて展開する伝法古墳群の存在から想定される有力層の形成とその墓域周辺の東平遺跡が8世紀に発展するという、また古代東海道を含む交通の要衝に位置し、富士川扇状地の最も東側に位置する和田川の湧水地付近にあたることなどの地理的状況も東平遺跡を富士郡家と考える根拠となっている。

また、東平遺跡に隣接して三日市廃寺跡とされる古代寺院が存在する。明確な寺域や構造は明らかとなっていないが、石川寺式の影響を受けた丸瓦などが出土している。なお、この瓦は小田原市千代廃寺出土瓦の文様構成の一部と共通していることから、足上郡からさわ瓦窯の工人が技術供与をして三日市廃寺の瓦を生産したと考えられており、7世紀における在地首長間の郡域を超えたネットワークの存在が指摘されている（田尾 2011）。

伝法古墳群の連動 東平遺跡の西側エリア内には石室規模が明らかに小さい古墳が点在している。その中の一つに西平第1号墳が存在する。石室の発掘調査が部分的に行われているに過ぎないが、方頭大刀や蕨手刀に加えて、銅製の腰帯具が出土している。それらの副葬品から被葬者は富士郡家大領級であると想定される。8世紀に展開する郡家周辺に6世紀

後半以降場所を変えながらも古墳が造られ続けていたことを示している。

富士川西岸古墳群の連動 富士郡家周辺で西平第1号墳を含む小石室墳が造られている頃、富士川西岸古墳群でも6世紀後半以降の造墓活動が谷津原古墳群を含む各古墳群で継続されていることが分かっている。特に妙見古墳群ではその大部分が7世紀末から8世紀のものと推定され、I2号墳やI14号墳からは火葬骨を収める蔵骨器に使用されたと考えられる有蓋短頸壺が出土していることから、火葬という新たな葬送概念を取り入れた富士郡家の官人の墓であると考えられることができる。

富士郡家と構造的集落 郡域における政治的、経済的、宗教的中心地が郡家であり、それが東平遺跡周辺であることはすでに述べたとおりである。郡家の役割は様々であり、これまで「官衙関連遺跡」として理解されてきたような複数の集落と有機的関係を有していたと考えることが出来る。例えば、富士郡家を中心に広がる街道や境界の管理を行うことや、荷揚げ場やそれらを一時的に管理する管財的要素を持つ集落、または、それらの監視を担う集落など様々な性格を有する集落を有機的・構造的に結びつける中心的役割を担っていたのが6世紀以降に成長した在地首長層であり、富士郡家の郡司層の姿であったと考えられる。

具体的に境界を管理する遺跡としては天間代山遺跡があげられる。天間代山遺跡は県道414号線（大月線）付近の丘陵上に位置する遺跡で富士郡家からは4kmほど離れている。限られた調査ではあるも

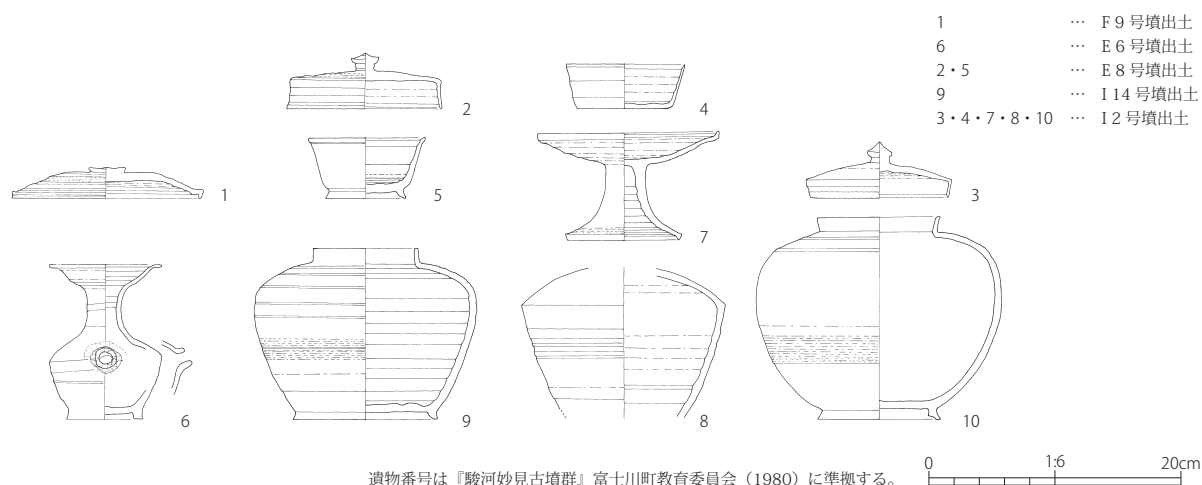


図7 妙見古墳群出土須恵器

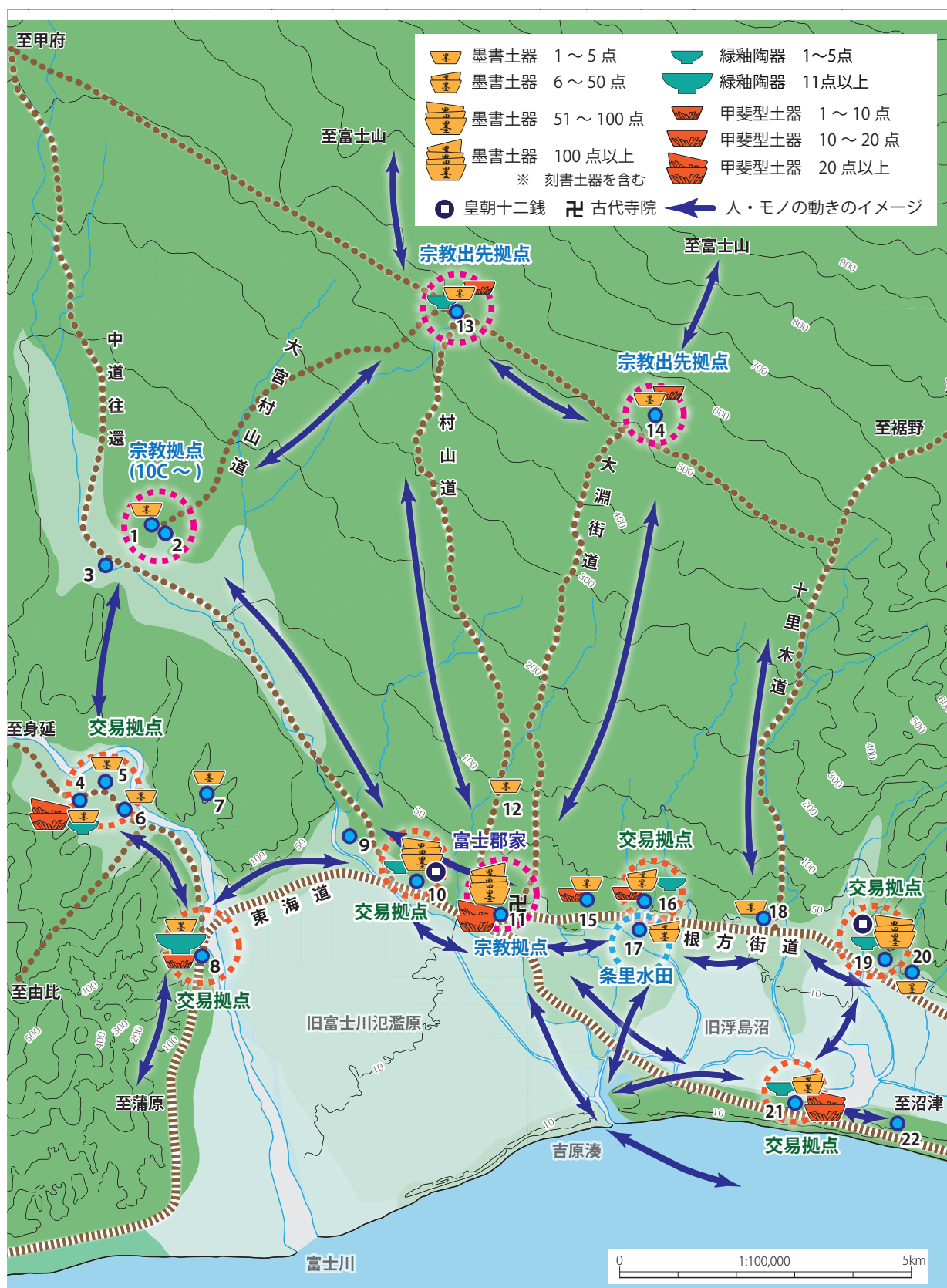


図8 古代富士郡家周辺の景観（9～10世紀）

のの奈良時代から平安時代にかけての建物跡から墨書土器や転用硯などが出土しており、物資の往来などを監視し、富士郡家の玄関口を管理するような性格を持ち合わせていたと想定できる。

また、富士川西岸古墳群の周辺では7世紀には明確な集落が展開しなかったにもかかわらず、8世紀に入り小規模ながら、古墳群に隣接した破魔射場遺跡が展開することは、古墳の造営母体としての位置づけよりも富士郡家の実施する境界管理という役割を担っていた可能性も想定されよう。

3 富士川河口周辺に展開する

古代物流ターミナル

富士川河口西岸の物流拠点 富士川を介した甲斐との物流が本格化するの9世紀後半になってからである。現在の富士川サービスエリア建設時に発掘調査された破魔射場遺跡や県道10号線沿いに展開する浅間林遺跡からは甲斐で作られた甕や坏がまとまって出土しているほか、東海道や海路をつかって西方から運ばれた灰釉陶器や緑釉陶器なども多く出土している。富士川河口西岸に展開する破魔射場遺跡には多方面から運ばれる様々な文物が集まり、ここを経由して行き先を振り分けるような性格を有する物流拠点であったと位置づけることができよう。

田子ノ浦砂丘上に位置する交易拠点 富士マリンプールの東側の田子ノ浦砂丘上に存在する三新田遺跡でも、9世紀頃の甲斐との交流を示す土器が多く出土している。また、「三枝」の墨書がある土器も注目される。三枝とは甲斐国山梨郡に本拠地を置いた三枝氏との関連を想定することができ、甲斐との頻繁な交流を見ることができる。遺跡はラグーンである浮島ヶ原に面し、後の東海道や吉原湊に面していることから交通の要衝として、他地域からのモノや人を迎える交易拠点としての性格を有していたと考えられる。

おわりに

富士郡家と周辺に展開する遺跡に対して、富士川を使った交易という側面から評価をしてきた。川は現在でも市域を分ける際の境界としての位置づけがなされるが、それと同時に「道」としての位置づけができることが明らかである。また、これまで触れてきた遺跡が、現在でも幹線道路沿いに位置しているということは、都市の発展にとって道の果たした役割が大きかったということを示している。富士郡家は、富士川や和田川、太平洋沿岸の水上交通と東海道駅路などの複数の道の結節点である要衝であり、それまでの在地首長層の成長した本拠地である事が占地の決定的要因であると結論付けられる。

参考文献

- 石川 武男 2008「富士川西岸域古墳群の様相」『谷津原古墳群 平成16・17年 第4・5時調査報告書』富士川町教育委員会
- 大谷 晃二 2022「谷津原1号墳の単竜環頭大刀」『富士市内遺跡発掘調査報告書 令和2年度』富士市教育委員会
- 佐藤 祐樹 2015「清水岩の上遺跡出土の弥生土器」『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成24・25年度—』
- 田尾 誠敏 2011「師長国造領の分割と地域拠点の成立—考古学からみた在地支配と首長層の動向—」『小田原市郷土文化館研究報告』No.47
- 藤村 翔 2019「富士山・愛鷹山南麓の古墳群の形成と地域社会の展開」『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊30

図1・4・8は藤村氏作成の富士山かぐや姫ミュージアム展示パネルを一部修正